

—INTERNATIONAL CONFERENCE ON ENVIRONMENTALLY SOUND WATER RESOURCES UTILIZATION—に参加して

矢部 浩規*

はじめに

11月8日～11日までタイのバンコクで、AIT（アジア工科大学）とIWRA（国際水資源学会）主催による国際会議（ENVIRONMENTALLY SOUND WATER RESOURCES UTILIZATION）に出席してきました。開発土木研究所からは河川・環境両研究室から私を含めて6名参加しましたが、今年は海外に行く機会が10月のアメリカに続いて2度もあって、急に国際化づいた感があります。東南アジアで勤務していた吉井室長は別として、海外が不慣れな私達にとっては非常に貴重な経験に恵まれました。主に会議の様子やバンコクでの印象などを紹介したいと思います。

国際会議の様子

国際会議というものには今まで参加したことがなくて、ましてや海外でとなると想像もつきませんでした。てっきり大学で行われると思っていたのですが、会議の場所は宿泊しているホテル（Ambassador hotel）の講堂が使用され、講演や開催セレモニー（タイ国の王妃も見えられた）のときなどは200人以上の会場に、研究発表等が行われるときは80人ほど聴衆可能な3会場に区分されます。会場の向かいや隣は宝石やブティック、レストランなどの店が並んでおり、またエレベーターを上るだけで自分達の部屋に行くことができ、ホテルから一歩もでなくても用が足りる、まさに職住近接の生活でした。

研究発表・議論での公用語はすべて英語で行われ、その世界的な普及は当然のこととはいえ、母国語以外の人々が話すのを聞くといつも驚か

されます。150名以上の研究者、技術者が参加していて、その地域はタイを初めとする東南アジアの国々のほかカナダ、アメリカ、スウェーデン、ドイツ、オランダ、ポーランド、中国、インド、オーストラリア、ケニアなどでした。プレゼンテーションの方法や質問にも戸惑いながらも、各セッションのchairmanやAITの今村先生にも配慮していただき皆んな無事に英語での研究発表を行うことができました。

この会議は4日間にわたって行われましたが、その目的は水資源の開発可能性と水利用のアセスメント・予測について、最新の研究・技術の動向の世界的な規模での情報交換です。会議のテーマは、私達の発表した環境的・経済社会的な水利用アセスメントと流出・流入に関連した水理学的な研究のほかに、財政的・法律等制度的な視点での水資源・水需給に関するアセスメントに大きく分けられて行われましたが、特に環境問題への対応や環境保全方法を中心に議論がなされました。開催地のタイにおいては、乾季における都市、農村地域での水供給・かんがい計画などの調査、水資源開発による環境影響調査を多額のお金で行っているそうです。そのほか、現在30あまりの国々の協力で治水・利水事業に関するプロジェクトが行われていて、各国の技術者による協力が不可欠であることも説明されていました。それぞれの地域、国によって事情は異なっており、解決方法に対しても答えがでない問題も多くて、今後、詳細な調査とともに環境保全に対する住民参加や既存ダムの有効利用など、いかに調整していくかが大きな課題であるといえそうです。

*環境研究室研究員

気候など

タイの季節は雨のあるなしで、雨季（5月～10月）と乾季（11月～4月）に分けられます。11月～2月は1年のうちで最も寒い時期にもかかわらずバンコクでの気温は30℃あり、日本の真夏のような感じでした。日中外を歩くのはかなりの体力を要して大変ですが、日陰にいると涼しく決して蒸し暑くはなく空っとした暑さです。タイにいる間は雨は一滴も降らず（道を歩いていて何度か排水口のようなものから水が降ってきたことを除いて）、毎日同じような青空が広がっていましたが、降水量はタイ南部を除くと平均1200～1400mm程度だそうです。バンコクを流れるチャオブラヤ（メナム）川のデルタ地域ではいたるところ洪水地域が存在し、古い都であるアユタヤから北西部にかけてはそれを利用した浮稲地帯が広がっています。

バンコクとパタヤ

バンコクに来て最初に目についたのは、ドンムアング空港からバンコク市街までの車中でドイツや日本製の高級車が多かったこと、また近代的な高層ビルが林立していることです。バンコクの交通渋滞が有名であることはテレビなどで知っていましたが、東南アジア諸国の水田の広がる農村や農耕文化の国をイメージしていたせいか、想像していたのとは少し異質だなと感じました。政治・経済・文化の中心であることは、街の中を歩いてみるとその活気や熱気から十分伝わってきます。歩道には露店や屋台が続き、暑さと自動車の騒音や排気ガスが充満する中を人々が行きかかって、また所々でバスを待っている人ばかりができています。バイクをTAXI代わりに使用していて、若い女性がバイクの後部座席に乗って渋滞の中をすいすいと走る姿は、日本でいえばただの暴走族と間違えられるでしょう。

パタヤはタイ湾に面した海岸沿いのリゾート地で、高級なリゾートホテルがあちこちに建ち並んでいます。バンコクからパタヤまで2時間30分ほどで行くことができますが、海上から眺めるパタヤビーチの景観は、欧米やオーストラリアなどのリゾート海岸と同じような錯覚を引

起こします。外国系の資本が入っているせいでしょうか。宿泊しているホテルの敷地内にはあちこちに警備員がいて、ホテル自体が他の地域と隔離されているような環境を創りだしていました。また、ビーチからボートで30分ほどで島に渡ることも可能でパラグライダーなども体験できます。

農村に行く機会は残念ながらありませんでした。ただ、たぶん農村から働きにきている素朴で純粹そうなレストランの店員や、パタヤまでの途中にある通りすがりの地方の街で、道路沿いに隙間なく商店や住居が並んでいる様子などを見ることができました。バンコクであれば都市生活が十分可能な感じがしますが、実際、タイで都市らしい都市というのはバンコクだけといってもよく、第2の都市チェンマイは10万人ほどです。また、全人口の8割は農村に住んでいて、現在バンコクに住む人々でも故郷は農村であることが多いそうで、やはり農耕文化が基盤になっていそうです。今度訪れる機会があれば、ぜひ農村地域を見てみたいと思いました。

タイの物価と言葉

タイでもものを買うときの高いか安いかという目安は、生活の仕方や物の対象によってかなり違いますが、日本の感覚で判断すると安いと感じるものがほとんどです。バンコク市内での移動メーターがついているTAXIを初めて使用したときの話しですが、メーターを見ると770と見えて40分ほど乗っていたので、日本の感覚だと770バーツ（1バーツ＝約5円弱）かなと思ったところ、実は77バーツとのこと。日本で40分も乗っていれば3000円以上はかかるだろうなという感覚からすると、かなりの開きがあります。しかし、初めのうちは日本の感覚で安い安いと思っていましたが、そのうち慣れてきたせいか、日本であればたいした金額でもないのに高いなと感じたりお金が惜しいと思えてきたのには不思議でした。参考までに、屋台での昼食は20バーツぐらいいくらに対してデパートでは100バーツぐらい必要であり、道端で売っている氷水が10バーツ、ホテルでのコーヒーは45バーツ（ただし、これだけで生演奏が聞ける）だった

と思います。

英語で四苦八苦してる状態なのに、とてもタイ語まで頭が回らなく、コックンカラップ（どうもありがとう）とマイペンライ（大丈夫、どうにかなるさ）しか使えませんでした。これだけでも相手は親近感を覚えるようです。タイ語が使えるとなにかと役に立つと思いますが、文字の方はどうも読む気も書ける気もしません。

ドリアンとトムヤムクン

タイで印象に残った食べ物を紹介します。

ドリアンとは果物ですが、ココナッツミルクの上に乗せていただきました（写真参照）。独特のにおいがして、味も食べた人の話では沢庵の砂糖づけのようでおいしいとは御世辞にもいえないそうです。トムヤムとはタイの酸っぱいスープで、海老が入っているのがトムヤムクン。茸や野菜、肉など見てなにかがわかるものは食べても大丈夫ですが、緑や赤色の着いたもの（たぶんトウガラシ）は注意した方がいいと思います。

タイ料理は辛さで味がわからないものを除いて、全般的においしいと思います（デザートプリンも）。



写真-1 バンコク市内

タイの舞踏

9日の夜はディナーが催され、タイの音楽と舞踏を楽しむことができました。コーンと呼ばれる仮面劇は、音楽の伴奏をバックに無言で体



写真-2 タイの料理



写真-3 タイの舞踏

だけで感情を表現する踊りで大変珍しいものです。また、踊っている人の首と手の動きがタイの文字に似ていたのが印象に残っています。

おわりに

学生の頃、年に2度はタイに遊びに、しかもそのほとんどが1人で行っていて、今でもタイ語の本を持ち歩いている友人がいます。日本から訪れると確かにお金の面からは上流階級になったような気分が味わえますが、実際に来てみてそれだけではない彼のなん度も行きたくなるような気持ちがわかりました。

ホテルの従業員の話だと、バンコクだけでなくパタヤでもよく国際会議が開かれるそうですし、そのほかプーケット、チェンマイなども楽しそうなので機会があれば是非行ってみたいかがでしょうか。